

北日高・戸蔦別川十の沢ピパイロ岳南西面直登沢

戸蔦別川ピパイロ岳南西面直登沢～九の沢右股下降

2015年9月20～21日

金澤弘明

7時過ぎに6号堰堤脇に到着し車中泊。先月の下山遅れが影響しているのか、どうにもやる気が出てこないし、酒を飲んでもちっとも旨くない。恐ろしいほどの星空を見上げながら何でこんな所にまで来てしまったのかとひどく気弱になっていた。早朝3時半に起床し、気力を奮い起こしエサオマン林道分岐に移動。分岐には車輛が5台あり、連休らしくエサオマンからカムエクまで行くという3Pがいた。

出発して5分、地図を車に忘れたことに気づき取りに戻る。通いなれた十の沢までの道程を黙々と歩きながら、この期に及んでもまだ敗退の正当な理由(言い訳)を探す情けない自分がいた。十の沢の下流部は河原が狭く歩きづらい。南西面直登沢の出合いは1270mで、この出合いまでは一月前の雨中の敗退劇を含めこれまで3回通っているが、ここまでの溪の様子はどうにも記憶と印象が違って直登できずに小さく巻く場面が何度か続く。「こんなに手が掛かる沢だったかなあ、どうせなら登れないくらい悪ければ撤退の良い口実になるのに」などと思いながら進んで行く。

直登沢は左岸から4mの垂滝になって合流してくる。下流側を直登すると狭い函の中に樋状3m。越えるとすぐに最初の核心、1290mの二股状で左は25m位の滝になっていて、その右岸岩壁に灌木の付いた斜めバンドが走っている。灌木が上まで繋がっているので手掛かりには苦労しないが傾斜がきつく、スタンスは抜けそうで見た目より悪い。右斜上して落ち口に近づくとすぐ上に簡単そうには見えない5mくらいの滝が続きまとめて巻いてしまう。結局、ここは通すと三段で35m以上はありそうだ。連続する小滝群に続き出てくる5～8m位の滝は乳房を沢山つけたフェース状だったり、白い岩脈にそって水流が岩を割っていたりと表情が豊かだ。

1410m二股を右に進むと凹角状の滑滝が出て、10m滝を直登するとこの沢の核心である1490m二股だ。ピパイロ頂上に向かっている沢筋は右股だが詰めのハイ松漕ぎが大変らしく、頂上稜線に直接突き上げる左股に進む。左股は25m位の滝になっていて直登は難しそう。右岸は小さな砂利が乗った植生乏しいフェースになっていてここから登れそう。だましまし右上すると、下からは見えなかったがこの滝は短い河原状を挟むものの、実質5～6段、80m以上ある大きなものだった。さらに4段40mほどが続きCo1640mまで気を抜く暇が無い。普通なら源頭となるような沢の上部で、核心部と言えるこれほど大きな連滝が現れるのも珍しい。1640mの小さな二股を右に進み滝を2つ登るとさすがに源頭近しを思わせるが、先日の雨の影響か1800mまで水は切れなかった。露岩の潤滝を繋げ、最後に花崗岩のスラブを快適に岩登りすると藪漕ぎ無しで頂稜の本峰と西峰の中間付近に出る。頂上までは10分ほどだった。

快晴無風、久し振りの北日高主稜の眺めを楽しんでから下降に移る。予定では水場のコルの東から七の沢左股のつもりだったが、コル到着が1時を過ぎていて時間的な余裕が無くなったのと、右膝がひどく痛み出していたので未知の枝沢を下るよりは勝手のわかっている九

の沢右股を下ることにした。

下るにしたがいますます膝が痛くなり痛み止めの座薬を一本追加投入する。右股は以前ここを下った時より邪魔な倒木が目立つ。九の沢本流に合流してからも滑の岩盤下降は膝につらい。30～40分おきに休憩を入れ、水場のコルから八の沢出合いまで5Pを要してしまった。

04:55 出発-06:20 八の沢-06:50 十の沢-09:25 1270m二股-10:00 1410m二股-11:45 頂稜-11:55 ピパイロ岳 12:30-13:10 コル-14:45 960m二股-16:00 八の沢-17:10 エサオマン分岐下山

参考グレード 戸蔦別川ピパイロ岳南西面直登沢 3級

初めて戸蔦別川に入ったのは2003年沢例会での九の沢だった。その後は中日高や南日高に集中し、戸蔦別川にはあまり入っていなかったが、2012年に集中的に戸蔦別川に入る機会があり、この頃に戸蔦別水系の主要な支流の全トレースを意識するようになったと思う。先月、その最後の山行となるはずであったP1967南面からの継続計画では増水により下山遅れを引き起こしてしまった。

今シーズンに完遂できるはずでいたのに来年に宿題を残すのはどうにも不本意だったし、今後はいつ沢に行けなくなるかもしれないとの思いもあり、今回、単独になったが行くことにした。今夏はあまり天候に恵まれず、先日の大三の事故や下山遅れの影響もあってか、1270m二股まで気合不十分なまま進んでしまった。援助の期待できない直登沢に入ってからはずがに遡行に集中していたが、以前と比べ「直登」への意気込みは薄くなり「巻いたほうが楽なものはさっさと巻いてしまえ」であったし、ルート取りに迷った時は安全側をとるようになっていた。アグレッシブさが失われたのは年のせいなのか技術体力の衰えなのか・・・

戸蔦別水系では途中敗退を含め20山行、遡下降でトレースした沢は30本（延べ37本）を数える。まだ2～3本、他に気になる支流がないわけでもないが、重箱の隅をつつくような、とても主要な支流とは言えないものばかりである。そう長くもない沢登り人世であれば今回の山行をもって一応戸蔦別水系は完了とし、願わくば次なる目標に一步を進めたいと思っている。